

令和3年度 学校教育自己診断 中学校（共通項目）

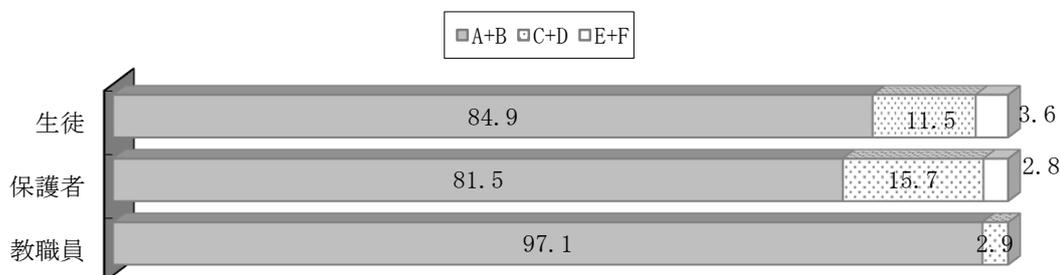
1. 学校の生活について

生徒 学校へ行くことが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くことを楽しみにしている。

教職員 学校では、生徒がいきいきとした学校生活を送れるよう、学校全体で取り組んでいる。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:生徒+3.2%、保護者+1.3%、教職員+4.8%

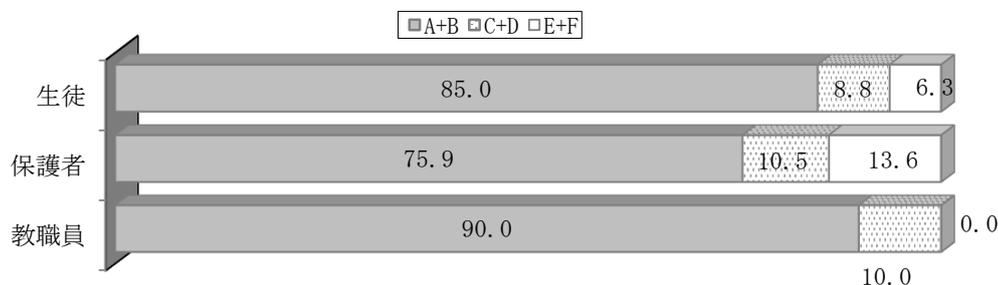
前年度との比較において、全体として高い数値を維持しており、多くの生徒にとって学校が楽しく思える場所となっていると評価することができる。しかし、15%程度の生徒が否定的に捉えていることも事実であるため、新型コロナウイルス感染症予防について十分に踏まえた上で、全ての生徒が安心して学べる学校環境づくりを推進していく。今後も、定期的実施している生活アンケート等の結果も複合的に分析し、引き続き生徒の居場所づくりの取組を推進することが求められる。

2. 「確かな学力」の育成について

生徒 先生は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

保護者 学校は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

教職員 学校では、生徒が意欲的に学ぶことのできる授業づくりのために、全校的な研究が行われている。



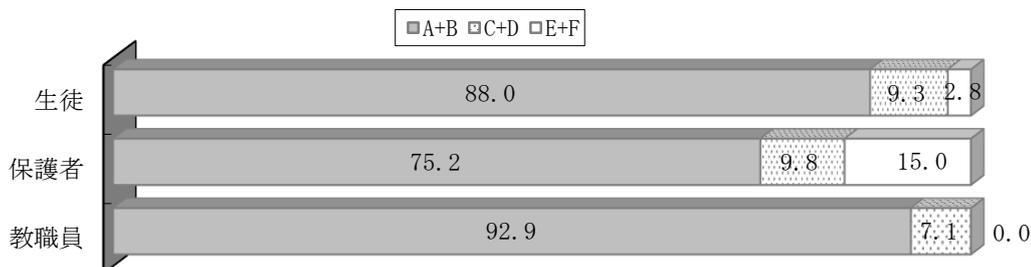
〔分析〕

前年度比:生徒+6.6%、保護者+8.6%、教職員+3.8%

三者とも前年度と比較して肯定的回答が増加した。特に、生徒・保護者において大きく増えており、新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」への授業改善において、対話を取り入れた様々な工夫が定着してきたことが要因として考えられる。教職員においても、各学校の研究課題の共通認識を図ることや、全校的な授業力向上に向けた取組の充実等の成果であると考えられる。今後も、教職員一人一人が生徒の関心・意欲を高めるために、試行錯誤しながら授業改善に向けた教材研究を行うことが求められる。保護者については、否定的な意見のほかに、「わからない」とする回答も一定数あるため、各学校での取組を積極的に発信していくことが求められる。

3. ICTの活用について

生徒 コンピュータやプロジェクターを使った授業は、わかりやすい。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。



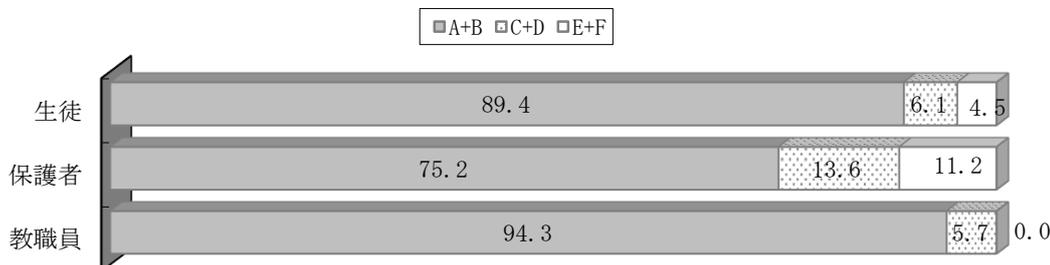
[分析]

前年度比:生徒+3.2%、保護者+13.0%、教職員-5.6%

生徒・教職員の肯定的回答が高い数値となっている。また、保護者の肯定的な回答も大幅に増加しており、GIGAスクール構想による1人1台端末の活用が推進されてきた成果であると考えられる。しかし、一方で保護者については、児童・教職員と比較すると低い数値である。今後も、ICTを活用し、児童にとって分かりやすい授業づくりの推進が求められる。また、保護者に対して、授業内容や様子等を学校だよりやホームページ等を活用して周知を行う必要がある。

4. 成績・評価について

生徒 学校が出す学習の成績・評価について、納得できる。
 保護者 学校は、子どもの学力や学習状況に対する評価基準を、適切に提示している。
 教職員 学校は、生徒・保護者にわかりやすく、適切な評価基準を提示している。



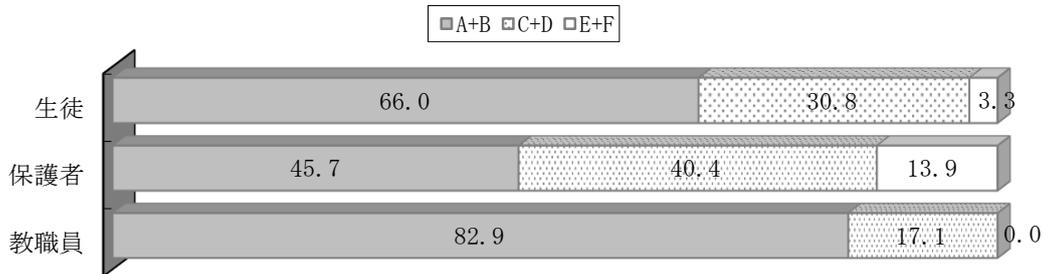
[分析]

前年度比:生徒+5.8%、保護者-0.9%、教職員+0.5%

学習に関する評価や成績は、生徒が自らの学習活動を見つめ直すきっかけとしての機能とともに、保護者の学校に対する信頼や協力を得る手掛かりとしての機能も有することから、妥当性や信頼性、透明性を高める取組が不可欠である。生徒においては、前年度から肯定的回答が増加しており、各校の取組の結果であると考えられる。しかし、保護者の回答には、生徒と比較すると肯定的回答が少なく、「わからない」の回答も一定数あることから、保護者に対して、学習評価が通知表の評定(5段階)だけで伝わるということがないように、学級・学年懇談や二者・三者懇談の機会を十分に活用しながら、学習評価に関する事項(成果と課題等)を丁寧に説明していくことが求められる。

5. 家庭学習について

生徒 家では、自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。
 教職員 学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。



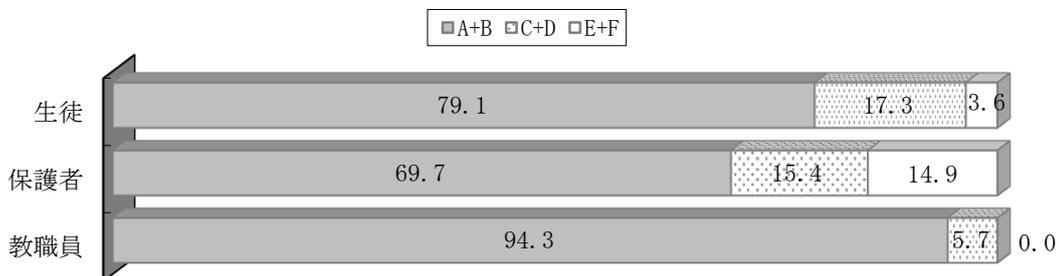
〔分析〕

前年度比:生徒-0.8%、保護者-1.6%、教職員+1.4%

昨年度と比較すると、三者とも肯定的な回答はほぼ同様の結果で、生徒の約3割、保護者の約4割が否定的な回答であることから、自学自習力の育成にまだまだ大きな課題があると考えられる。補充学習や、自学学習など様々な学習の場の設定や、家庭学習の充実に向けた家庭との連携を通して、「自ら学ぶ力」の育成について検討していく必要がある。放課後学習会・テスト前学習会等への参加促進の強化等は、具体的な取組の1つと考えられる。また、1人1台端末を有効に活用し、家庭で自らが学習を向かうための方法等、丁寧に指導していくことが求められ、自学自習力を育成することが求められる。

6. 読書活動の推進について

生徒 学校では、朝読書など、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 保護者 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 教職員 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。



〔分析〕

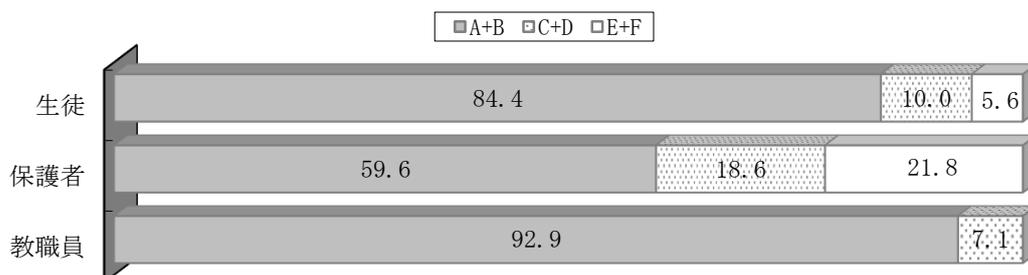
前年度比:生徒-5.6%、保護者-3.3%、教職員+0.5%

三者とも一定の数値が得られている。朝の読書活動が全校的に推進されていることや、各学校の図書館が室内環境や蔵書の整備等が進められてきたことへの評価が、一定数値に表れたものと考えられる。

今後も引き続き、生徒の読書量を増やしていく取組を進めるとともに、家庭で読書することにつながる取組を推進することが求められる。

7. キャリア教育について

生徒 授業や様々な学校での活動の中で、自分の生き方(自分らしさ、他の人や社会とのかかわり、進路など)について、考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、それぞれの生き方(卒業後の進路を含む)について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、生徒が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。

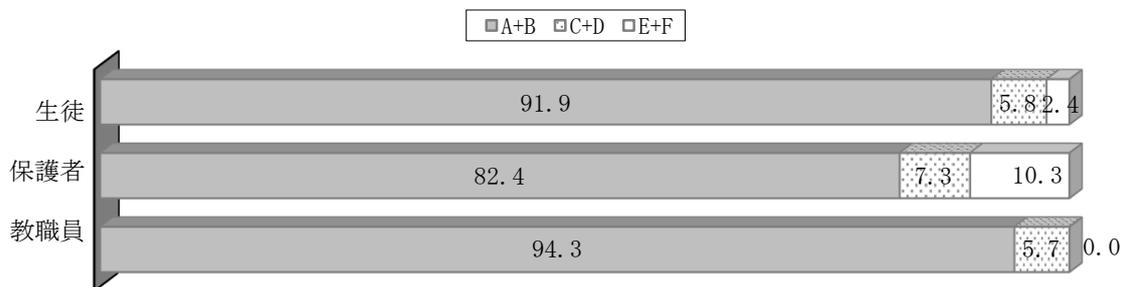


〔分析〕
 前年度比:生徒+3.9%、保護者-6.8%、教職員-0.9%

前年度までと比較して、生徒は肯定的な回答が増加しており、教職員も非常に高い数値を維持している。ただし、保護者の肯定的回答については、生徒・教職員と比較するとかなり低く、また「わからない」の回答も20%以上となっている。キャリア教育に対する意識を生徒の自己肯定感や自尊感情の醸成に重点を置き、全ての教科や教育機会を通じて生徒に「自分らしい生き方とは何か」や「他者とのかかわり」を意識させ、そのことがキャリア教育であるということを、保護者に伝わるように発信していかなければならない。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

生徒 学校では、人権の大切さや社会のルールについて、道徳の授業などで学ぶ機会がある。
 保護者 学校では、中学生として守るべきルール・マナーや人権の大切さについて、適切に指導してくれる。
 教職員 学校では、生徒が人権の大切さや社会的なルールを身につけることができるよう、年間計画に基づき、道徳教育を継続的に行っている。

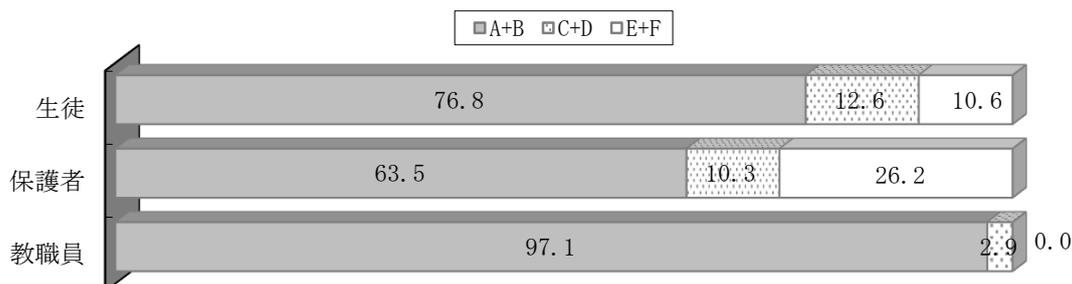


〔分析〕
 前年度比:生徒+0.7%、保護者+3.2%、教職員-2.6%

各学校においては、計画的に道徳教育推進計画を立案、実践しており、多くの教職員がその取組を実感している。保護者からも、学校の取組について一定の評価を得ていると考えられる。引き続き、学校全体で特別の教科道徳を学校における心の教育の要と位置付け、規範意識の醸成と豊かな人間性の育成をめざした取組を計画的に推進していくことが求められる。また、学校の取組について家庭と連携していくことも必要である。

9. いじめ防止・対応について

生徒 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を進めている。
 保護者 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。
 教職員 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を、組織的に行っている。



〔分析〕

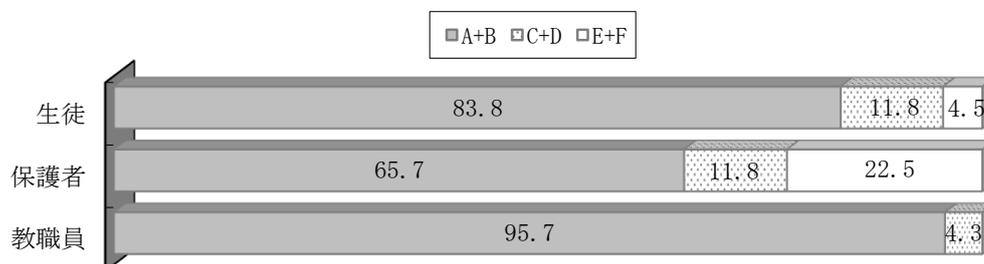
前年度比:生徒+11.9%、保護者+3.8%、教職員+3.3%

前年度と比較して、三者ともに肯定的な回答が増加している。特に、生徒について大幅に増加したが、各中学校において生徒会本部を中心にいじめについて考える取組を行い、いじめを許さない集団作りや、全ての教職員が「いじめは決して許さない」という毅然とした姿勢を示していることが成果として表れている。いじめ防止の取組は、いじめを起こさせない日頃からの環境整備が重要であり、生徒会本部による啓発活動だけにとどまらず、生徒の望ましい成長を促す指導や、学校全体のチームとして生徒指導を行う体制の構築や共通理解等が求められる。

保護者については、肯定的な回答が増加したものの、「わからない」の回答が依然として多く、大きな課題である。いじめの未然防止、早期対応に向けて学校として取り組んでいることを、「いじめ対応リーフレット」等を有効に活用しながら、積極的に発信し、保護者の理解につなげていかなければならない。

10. 「食の教育」について

生徒 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。(生徒)
 保護者 学校では、「食育」についての取組を推進している。(保護者)
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。(教職員)



〔分析〕

前年度比:生徒+15.4%、保護者+7.3%、教職員+8.0%

三者ともに肯定的な回答が大幅に増加したが、これは、家庭科での成分表の読解や社会科での食糧問題の考察等、教科を横断した「食」への取組や、生徒委員会主体の給食の残食について考える活動等の成果と考えられる。今後も、生徒の実態に即した指導目標を設定し、食生活や健康に関する行動の変容に資する取組になるよう努めていくことが求められる。また、保護者には「わからない」の回答も多いため、学校の取組を積極的に発信していくことが必要である。

※昨年度まで質問事項としてあった「保護者や地域との連携について」は、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で学校行事などを中止したため、質問項目から削除しております。